

古代ギリシャの遺跡を歩いて

竹島 俊之

1989年7月19日、午前6時半、アテネ、スタンレイホテル。オレンジジュースをコップに汲みコーヒーをカップに注ぎ、おいしそうなハムを皿にのせ、さてバイキングの朝食を摂ろうとしたやさき、突然Mr. TAKESHIMAと私を呼ぶ声がスピーカーから聞こえてきた。その瞬間しまったと思い、玄関ホールに駆け付けたが後の祭り、これから出発しようとするギリシャ9日間の旅の迎えに来た観光バスに乗り遅れたのだった。前日アテネのマンノスという旅行会社でこのツアー参加の手続きをし、10万円弱の費用を払い込んだのだが、その時、朝の迎えは7時半と聞き、その心積もりを以て夜寝る前にこのツアーのための書類にもう一度目を通してみるとpick up は荒っぽい字で書かれているが、どうも6時半と読める、しかし確かに7時半と聞いたのだし、それにこの国柄そんなに早く出発することもないだろう、と安易に考えたのが、間違いのもとだった。フロントのボーイに掛け合くと、何度も呼び出しをしたのにと、ぶつぶつ言っていたが、結局、観光会社に電話をかけてくれ、観光バスは他のホテルを回った後、もう一度、私のホテルに迎えに来てくれて、無事、このツアー旅行に参加することが出来たのだった。それからは集合時間など、神経質なほど気を付けるようになった。

このツアー旅行は相当な強行軍で、6時半起床、7時朝食、8時出発、次の観光地のホテルには、大体6時半頃から7時に到着、8時から約2時間位かけてのディナー、慣れない英語を1日中使わねばならないこともあってきつい旅行であった。しかしそのおかげで、南ギリシャのコリントス、ミケーネ、ナフブリア、エピダウロス、スパルタ、ミストラ、オリンピア、バトラス、中部ギリシャのデルフィ、カランバカ、メテオラ、ヴェルギナ、北ギリシャのテサロニキ、フィリッピ、カヴァラ、ペラなど主な遺跡を訪ねることが出来たのだった。

ナフブリアを午前8時に出発しトリポリ、スパルタの町を通過して、タイゲトス山の斜面にある廃墟と化した中世の町ミストラを見物した後、バスは途中ほとんどの車を、パトカーさえも追い抜く程のもの凄いスピードで次の目的地オリンピアを目指した。鉄道の全く発達していないギリシャではバス交通に特に観光バスに路上での最優先権が与えられてれているように思われる。アテネ市内を見学していた折り、前方か

ら走ってくるバスが右折れの信号を出しているのが見えたが歩行者信号は青になっているからと思ひ横断舗道を渡り切ったとたん背後を右折れしてきたバスが通り過ぎ、一瞬ヒヤッとし、運転手に大声で怒鳴られたことを思い出す。

トウモロコシ畑、延々と続くオリーブの林が目を楽しませてくれる、オリーブの銀色の葉が波打っている。「あれはジブシーだよ」、時折ガイドの説明が入る。美しい松林に囲まれたオリンピアのホテル街に到着したのは、午後5時半頃だった。日本の観光地と同じく、沢山の土産物屋が軒を連ねている。今日は時間的に余裕がありそうだからこれらの店に入って何か良い土産物を探してみようと考えているとバスはそこを通過して博物館へと直行したのだった。ワイシャツをはだけ、金色のネックレスを光らせ、汗だくになりながら、ガイドは、この博物館で最も有名な「ヘルメースの像」の説明を英語と仏語でし終えると、「最も重要なものだけは説明しておきたいから」と言って次の部屋へと走り出し、もっと周囲の作品も見たいと思ひながらも一緒に次の部屋まで走って移動したが、その時、観光ツアーの限界に気がついたのだった。

翌朝、オリンピアの遺跡を見物した後で、ペロポネーソス半島の交通と商業の要所であるバトラを経て、リオンからアンティリオンへと船で渡り、ナフバクトスを経由して、デルフィへと向かった。コリンシアコス湾の水の深い青と周囲の木一本生えていない灰色の山々が美しいコントラストを呈している。バスはやがて急勾配の坂道を上ったり下ったりしながら、バルナツソス山麓へと入って行く。峻厳なそそり立つ岩山を見つめていると、古代においてギリシャのみならず、世界各地から神託を伺い到这里へ使者が遣わされたことも成る程と納得がいく。最初に思ひ出したのは、リュディア王クロイソスがベルシャとの戦いを前に、ギリシャの各地の神託所に使者を派遣して神意を問い、その神託が正しいかどうか試してみても、もしそれが正しいと判明したら、改めてそこへ使者を送り、ベルシャ出兵を断行してよいかどうかを尋ねる事とした。結局、それはデルフィの神託所であったという、あのヘロドトスの記述である。

バスが走っている道路の下方に様々な写真で見慣れている茶色と白のまだら模様の独特の円柱が見えてきた。アテーナ神域の円形神殿の周囲に立っていたドーリス式列柱のうちの復元された3本であった。残念ながら、近くまで降りて行って鑑賞することはできなかったが、ビデオカメラをズームにして撮影し、帰国してフィルムをみると、この場面が一番良く撮れていた。そこから少し離れた所にカスターターの聖水が流れている場所があった。神託所を訪れた人はまずこの水で身を清めたとの説明をガイドから聞き、早速手を浸してみた。

アポロン神殿、アテーネ人の宝庫の説明を聞いた後、山の中腹にあるほぼ完全な形で残っている古代劇場から木立ちに囲まれた蟬しぐれのふる、かなり急な坂道を登っていくと古代競技場跡に出た。石でできた観客席を含めほぼ原形をとどめている。このツアーに家族全員で参加していたアメリカ人の観光客の父親と高校生くらいの娘さんがこのトラックで100mを全力疾走して競争し、それをここにこ笑いながら母親

がビデオに撮っていた光景は、見ていて本当にほほえましかった。

それらの遺跡から100m くらい離れた博物館に入り、突然2m ほどもある二人の青年の裸身像に直面し、これは「クレオビスとピュトン」の像だとの説明をガイドから受けたときには本当に驚いた。法律を制定した後、旅に出てサルディスのクロイソス王の下にやって来たソロンに宝物蔵を案内させた後で、あなたが会った人のうちで最も幸福な人は誰であったか、と自分のことを名指してくれることを期待しつつ質問したクロイソスに対して、まずはテロッスを次にこのクレオビスとピュトンの名を挙げ、彼らの母親が祭りに行く時間になったのに乗っていく荷車を牽いていく牛が野に出ていたので、この息子二人が牛の代わりに車を牽いて走り、アルゴスのヘラ女神の社まで45スタディオンを走破し、アルゴス人の賞賛を受けつつ永眠し、アルゴス人はこの二人は世に最もすぐれた人物だとして立像を作らせデルフィーに奉納したというヘロドトスの記述を思い出したのだった。読書会でヘロドトスの「歴史」を読んでいて、この箇所を読んだ後、この逸話の持つブラックユーモアについて、議論を戦わしたことをまざまざと思い出したのだった。紀元前5世紀の人であるヘロドトスが語っている物語の主人公の像を眼前にして特別な感動に浸りながら、立像を凝視しつつ数分間まさに呆然と立ちつくしていた。ギリシャ文明が現代の文明の中で生き生きと躍動しているのを実感したのだった。最近、この像をクレオビスとピュトンと同一視することは、疑問視されていることをデルフィ博物館の説明書を読んで知ったのだが、私が受けた感動はいささかも減じることはなかった。

デルフィ から後のツアーでは、参加人員数はこれまでの半数以下に減り、バスも小型になったのだが、それだけ参加者同士がいつそう親しくなり、旅はますます楽しいものになっていった。北部ギリシャのカランバカという町に入ると前方に異様な形の灰色の奇岩が見えてきたメテオラであった。ガイドブックで読んだときにはさほど私の関心をひかなかったのだが、実際にその光景を目の前にして見ると、その異様さにただただ圧倒される。そしてよくもあんな所に建てたものと驚かされるほど高い岩の上いくつかの中世の修道院が建っていた。

ヴェリアという美しい町を訪れたとき、この町が使徒行伝の中で言及されていることを韓国籍のカナダ在住の牧師から教えられた。そもそもこのツアーが聖パウロの足跡を辿っているのだということを知ったのもそのときだった。フィリッピの遺跡を訪れ小さな小川に案内され、そこがヨーロッパの女性が彼によって洗礼を受けた最初の場所であることを知り、聖パウロの捕らえられていた牢獄を目の前にしながら、その牧師から使徒行伝のなかで記述されている出来事を聞き、深い感銘を受けたのだった。パウロとシモンが真夜中祈っていると大地震が起り、戸が全部開き、鎖は解けてしまった。獄吏が目を覚まし、戸が開いているのを見て、囚人は皆逃げってしまったと思い、自害しようとしたとき、「自害してはいけない、われわれは皆ここにいる」と叫んだあの話である。聖書が意識しないうちに、ぐんぐんと身近に迫ってくるのを感じ

たのだった。

テサロニキからアテネへ戻る途中でここがテルモビレーの古戦場跡だとガイドに言われ、ただ一人バスから降りて夢中になってカメラのシャッターを押したのだが、それはここで劇的な死を遂げたスパルタの将軍レオニダスのことを実に印象的に書き記しているヘロドトスの記述を思いだしたからだった。スパルタの町を通過したとき、あれはレオニダスの像です、との説明だけであつという間にそこを通過してしまい、実に残念な気持ちにかられたこともテルモビレーであればどこまで夢中になってカメラのシャッターを押す原動力になったのだと今にして思う。

ギリシャに着いて二日目、エビダウロス古代劇場で古典悲劇が土曜と日曜日に上演されることをホテルのフロントで渡されたパンフレットで知り、早速コリントス、ミケーネ、エビダウロス二日の旅のツアーに申し込みをした。

赤い狭竹桃が沿道に咲き乱れている道をバスは走りながら、やがて有名なコリントス運河に到着。切りたった崖の下、緑色の海の上を船が通っている。ミケーネでアトレウスの宝庫、獅子の門を見物し、とあるタベルナで昼食を済ませた後、ナフブリアという海に面した町に入り、あるホテルの前に止まり、ガイドが、二日間のツアーに参加している人は降りなさいという。降りたのは私と老夫婦だけで、皆に拍手されながら少々気恥ずかしい思いをしつつバスを降りた。他の人たちはその後、エビダウロスの遺跡を見物しそのままアテネに戻る一日ツアーの参加者たちだった。

ホテルでシャワを浴びた後、ナフブリオンの街を歩く、シエスタで商店は皆戸を開めている。バラミディの城跡へ登って行く途中、二人連れの女子学生が降りてくるとすれちがいざま何か言ったあと *δέν καταλαβαίνω* 「彼は分かっていない」と言ったのが、はっきりと聞き取れたので、*έγώ καταλαβαίνω* 「分かってるぞ」と言い返してやると、びっくりした顔をして何かしゃべりはじめたので、向きを変え真すぐに頂上を目指した。頂上から眺めたエーゲ海の美しさは今でも臉に浮かぶほどである。

午後5時頃、タベルナでは路上にテーブルを出してそろそろ夜の夕食の支度にとりかかり始めていた。魚が入ったショーウィンドウをのぞいて見るとおいしそうな伊勢海老がある、食欲をそそられたが、今晚はどうしても劇を見にエビダウロスへ行かねばならないのだからと諦めて、要塞のような島、ブルジイ島がすぐ目の前に浮かぶタベルナに腰をおろして、ビールとサラダとパンで簡単な夕食を済ませたのだった。

午後7時15分、観劇の手配をした旅行会社に行き、エビダウロス行きのバスを待ったのだが30分経っても、バスは来ない、店員も電話をかけたり、路上へ出たりいらいらしている。8時を少し過ぎたころバスがようやくきて、そこから1時間半くらいかかってエビダウロスに到着した。劇はエウリピデスの「ヒッポリトス」であったが、始まったのは10時を過ぎてからであった。古代劇場をそのまま使用し、暗闇の中でその輪郭をくっきりとみせている松林を背景にと心憎いばかりの舞台装置の中で劇は演じられ、台詞は全くわからなかったが劇の面白さは充分にたんのう出来た。

翌日、午後2時に迎えに来ることになっていた観光バスを待ち切れず、それをキャンセルして、朝早く営業バスに乗ってエビダウロスへ向かった。丁度日曜日のこともあってナフブリアから田舎へ帰る大勢の人が乗り合わせ、ギリシャ人の生活にじかに触れる気がしてとても楽しかった。

しかし遺跡を見物して営業バスを待っていると、タクシーの運転手がきて乗らないかという、アテネ行きのバスの時刻表を指さしてこれに乗るからいいと断ると、そのバスは日曜日には来ない、と言う。そんな馬鹿なことと思っただが、定刻を一時間過ぎても、二時間過ぎても営業バスは来ず、来るのは観光バスばかりであった。同じように営業バスを待っていた団体の観光客も電話でタクシーを呼び四、五人ずつに分かれて、それに乗り始めた。コリントスまでタクシーで行き、そこから鉄道でアテネに行こうと考えて、遺跡の入り口に止まっていたタクシーの運転手に掛け合うと予約があるから駄目だという。結局、四時間くらいかかって必至のおもいでその日乗ることになっていた観光バスを見付け、ナフブリアのホテルでキャンセルした客だなとガイドに笑われながら、後部座席にぼっとして腰をおろし、ふと前方を見ると前日一緒に降りた老夫婦が目にとまった。そのときギリシャでは焦らないこと、と肝にめいじたのだった。

人為的、作為的な面が全く感じられない、まさに神からの授かり物のごとく完成した形で現れたホメーロスの文学、それを受け継いだ形で開花した、トゥキュディデース、ヘロドトスの歴史家、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデース、アリストファネスという悲劇、喜劇作家、哲学の元祖といってもいいプラトン、アリストテレスの著作などで代表されるギリシャ古典の諸作品、ヘレニズム時代に新約聖書で代表されるように地中海沿岸で広く公用語として使われたコイネー・ギリシャ語、ビザンティン帝国で結局はラテン語をくちくした中世時代のギリシャ語、トルコの圧政下にあっても苦しみながらも、自分たちの祖先から受け継いだ文化遺産を大切に保持し、やがてセフェーリス、カヴァーフィス、カザンツァークスで代表される現代ギリシャ文学の花を開かせ、それを育んだギリシャは実際に訪れてみると、まさにそれらの誇り高い文明が幾重にも層をなし、沈殿しているという形容がぴったりとあてはまる国であった。

この国の持っている文化遺産を真に理解するためには多方面からの研究者の多くの努力が必要であるし、また人類に無限の文化的富を与え続けてくれる尽きない泉であるというのがわずか一ヶ月余りであるが、ギリシャを旅行しての私が得た結論だった。